

# 中間生体験と臨死体験の類似性

## ～ちょうちょ島の話～

大門正幸

### Similarities Between Life-Between-Life Experiences and Near-Death Experiences

#### —Story of Butterfly Island—

OHKADO Masayuki

It has been pointed out mostly by researchers working on cases of the reincarnation type (CORT) that life-between-life memories reported by children often have significant similarities to reports by near-death experiencers (Matlock & Giesler-Peterson, 2016; Ohkado & Ikegawa, 2014; Rivas et al. 2015; Sharma & Tucker, 2004). This article reports a case of a female child talking about her life-between-life experiences. The peculiar characteristic of her story is that the child claimed to have lived in a place she called "Butterfly Island." According to her, the only inhabitants of the island were fairies (apparently human souls) and butterflies. Her story reminds us of the near-death experiences of Eben Alexander reported in *Proof of Heaven: A neurosurgeon's Journey into the Afterlife*, in which he rode on the wing of a butterfly together with a woman who later turned out to be his deceased sister and was surrounded by millions of butterflies, all moving together, as if they were "a river of life and color, moving through the air." Sharing the similar features with the experiences of Eben Alexander, the child's story appears to be reflecting some deep characteristic of human consciousness and worth reporting in detail. Another interesting characteristic of the present-case is that the child claimed that she was able to see her parents from a "well" while she was on the island. This feature is analyzed from the perspective that children's expressions of the life-between-life state may be limited at least in two respects: (1) Their vocabulary tends to be too limited to describe details of the real experiences and (2) in order to describe their experiences, they have to have recourse to items that are available in their cultures.

**Keywords:** near-death experience, life-between-life memory, cases of the reincarnation type, butterfly

## 1. はじめに

子供の語る中間生記憶 (life-between-life memory) が臨死体験者が語る「あの世」との類似

性を見せるのは、よく知られた事実である<sup>1</sup>。たとえば、Sharma & Tucker (2004) は、バージニア大学知覚研究所のデータに見られる中間生記憶について語った子供達<sup>2</sup>のデータを臨死体験研究で用いられる尺度である Weighted Core Experience Index (WCEI) (Ring, 1980) および Near-Death Experience Scale (Greyson, 1983) を使って分析し、臨死体験との類似点を明らかにしている。Rivas et al. (2015) は中間生記憶にも臨死体験と同様に検証可能な外見上非肉体的知覚 (apparently non-physical veridical perception, AVP) を伴う場合がある点に注目し、そのような知覚を伴う例を 29 例分析している<sup>3</sup>。また、Ohkado & Ikegawa および Matlock & Giesler-Petersen (2016) は臨死体験と中間生記憶の類似性を分析した Sharma & Tucker (2004) が提唱する「三段階モデル」(three-stage model) を用いて中間生記憶の分析を試みている。

本稿で報告する事例は一般的な中間性記憶の特徴を持つが、それ以外に、(1) 当事者がチョウチョと妖精 (魂状態の人間) のみが生息する「チョウチョ島」にいた、と語っている点や、(2) 生まれる順番を決める大きなチョウチョがいた、両親を選ぶ際に「井戸から見た」と発言するなど、中間性記憶を語る子供の発言にあまり見られない要素が現れる点が注目に値する。(1) については、元唯物論者の脳外科医による臨死体験報告としてベストセラーになった *Proof of Heaven: A Neurosurgeon's Journey into the Afterlife* において Eben Alexander 氏が「無数の蝶々を見た」と証言している点との類似点が注目に値する。(2) については、子供の報告に対する文化的制約および語彙的制約が影響していると考えられ、臨死体験との共通性がさらに浮き彫りになる。

## 2. 事例の概略

本事例の中心人物は中部圏に在住のチヒロちゃん (2012 年 3 月生まれ) である。筆者がチヒロちゃんについて知ったのは知人を通してである。チヒロちゃんには 2 歳 2 ヶ月歳下の弟 (2014 年 5 月生まれ) のハジメちゃんがいる。チヒロちゃんは両親と弟の 4 人で暮らしている。

チヒロちゃんとは 2017 年 7 月 8 日、5 歳 4 ヶ月の時に、母親のユカさんと一緒に面談を行った。また、メールや質問紙を通して、ユカさんにはチヒロちゃんに関する基本的な情報を教えてもらった。

それによれば、チヒロちゃんが最初に言葉を発したのは 1 歳半くらいでその言葉は「まんま」、最初に 2 語以上の文を発した時期は不明だが、文は「まま、来て」だったという。中間生記憶について最初に話したのは 3 歳前後で、ご飯を食べている時や寝る前、入浴時、

---

<sup>1</sup> 本稿で言う「中間生記憶」(life-between-life memory) は Ian Stevenson や Jim Tucker、James Matlock が使う「幕間記憶」(intermission memory) とは若干の違いがある。すなわち、前者は胎内の時の記憶である「胎内記憶」を含めないのに対して、後者はそれを含む。しかし、本稿で言及する先行研究において「幕間記憶」が問題にされる時、考察の中心は「胎内記憶」ではないので「中間生記憶」と「幕間記憶」の概念上の相違は問題とならない。ども

<sup>2</sup> 彼らは cases of the reincarnation type with intermission memories (CORT-I) と呼んでいる。

<sup>3</sup> Rivas et al. (2015) の筆頭著者である Titus Rivas 氏は 2016 年に Anny Dirven 氏、Rudolf H. Smit 氏と共同で臨死体験における AVP に焦点を当てた研究を出版している (Rivas et al., 2016)。

唐突に話すことが多いという。父親は聞き流すだけだが、母親のユカさんは半分以上空想だと思いながらもたまに質問をし、答えに驚くこともあるという。

チヒロちゃんが中間生でいた場所はきらきらした虹色の場所で、妖精とチョウチョだけが住んでいる。大きいチョウチョが次にどこに行くかを決める。また、大きいチョウチョに訊くと何でも教えてくれるという。その場所には人間ではない状態の弟がいたという。また、井戸がたくさんあってそこから覗くと地上の様子が見え、両親を選んだという。ただし、どちらを先に選んだかは覚えておらず、選んだ理由についてはチョウチョにしか分からないとのこと。おなかの中に入る時はチョウチョと UFO が誘導してくれる。

狭義の胎内記憶<sup>4</sup>については、水の中で浮いていたという記憶があるとのこと。おなかの中から外は見えず、音が聞こえるだけだった。

誕生時については、よくわからないものがあって驚いたそうである。また、生まれる時もチョウチョが見てくれているとのことである。

過去生記憶については何も語っていない。

### 3. 面談の時の会話

以下に面談の時の会話を記す。基本的には語ったままと記載しているが、繰り返しや言い間違いなど内容理解の妨げになるような部分については適宜省略してある。また言及の便を考慮して発言者に番号を付与してある。図1は、面談時にチヒロちゃんが描いてくれたチョウチョ島の様子である。

大門1： お腹の中に来る前はどんなところにいたの？

チヒロ1： チョウチョがいっぱいいるところ。

大門2： どんなチョウチョがいたの？

チヒロ2： 虹色の羽のチョウチョ。いっぱいいた。

大門3： チイちゃん[チヒロちゃん]はそこにいた時、どんなふうだったの？

チヒロ3： お花がいっぱいあった。

大門4： チイちゃんは一人でいたの？

チヒロ4： ハジメくん[今の弟]がいる。

大門5： チイちゃんとハジメくんとチョウチョさんの他には誰かいたの？

チヒロ5： 妖精さんもいる。

大門6： で、何してたの？

チヒロ6： 好きなことしてた。

大門7： そこにいて、どうやってママのところに来たの？

<sup>4</sup>「過去性記憶」、「中間性記憶」、「誕生時記憶」を含めて「胎内記憶」と呼ぶ場合もあるので、その用法との区別のために「狭義の」という表現を付け加えた。

- チヒロ7: チョウチョに乗って来た。
- 大門8: チョウチョ島からママが見えたってこと?
- チヒロ8: 井戸で見た。
- 大門9: チョウチョ島に井戸があったってこと?
- チヒロ9: (うなづく)
- 大門10: ママは何してたの?
- チヒロ10: ……忘れちゃった。チョウチョ島にいた時はまだ人間じゃなかった。
- 大門11: どんなふうだったの?
- チヒロ11: 妖精さんだった。
- 大門12: チイちゃんも妖精さんだったんだ。妖精さんと今と違うの?
- チヒロ12: ほとんど同じ。でも羽はあった。
- 大門13: 妖精さんから人は見えたの?
- チヒロ13: 普通には見れないけど。
- 大門14: しょっちゅう見てるの?
- チヒロ14: いっぱい井戸があった。
- 大門15: 生まれる順番は決まってるの?
- チヒロ15: チョウチョさんがわかってるから。いつも絵を描かないといけないけど。ちょっと決まってる順番もある。
- 大門16: チイちゃんも長いこと待ってたの?
- チヒロ16: 待ってるんじゃない、遊んでる。で、チョウチョさんがさ、羽をパタパタしたらさ、絵を出せばさ、その絵がわかるからさ、チイちゃんたちが言うんだけど。妖精さんがいっぱい増えてくる。でもちょっと減ってくる。
- 大門17: それは下に行っちゃったから、ってこと?
- チヒロ17: それは知らない。でもチョウチョさんが知ってる。
- 大門18: チョウチョさんは何でも知ってる感じなんだ。で、チョウチョさんとお話したりするの?
- チヒロ18: チョウチョさんは絵を出してお話する。
- 大門19: ハジメちゃん[弟]との順番もチョウチョさんが決めたの?
- チヒロ19: それはさ、妖精さんたちが決めてもいい。
- 大門20: ハジメちゃんとも「兄弟になろう」って決めたの?
- チヒロ20: うん。いつもチョウチョさんがさ、ダメとかさ、マルとかやってる。決めるチョウチョさんがいるの。
- 大門21: 悪い人とかいないの?
- チヒロ21: うん、そこにはさ、優しい妖精さんとかしかいなかった。

- 大門 22 : いいところだね。こっちとどっちが楽しい？
- チヒロ 22 : チョウチョ島もこっちも楽しい。・・・天国ってチョウチョ島。
- 大門 23 : 亡くなった人はチョウチョ島に行っちゃうってこと？
- チヒロ 23 : 行って、妖精さんになって、また番が来れば人間になって、そこにいる。
- 大門 24 : ああ、じゃあ（他界した）おばあちゃんも妖精さんになって、チョウチョ島にいるってことね。
- チヒロ 24 : うん、妖精さんになって、また番が来たらまた人間になって出てくる。それ繰り返してる。
- 大門 25 : 番はどうやって決まるの？
- チヒロ 25 : うーん・・・いっぱいいるから分かんない。
- 大門 26 : じゃあ、みんないつかはチョウチョ島に帰るってことね。
- チヒロ 26 : （うなづく）
- 大門 27 : で、またこっちに戻って来るってことね。あっち行って、こっちへ帰ってきて・・・
- チヒロ 27 : だいぶちょっとかかるけど。だいぶかかる。
- 大門 28 : すぐには帰ってこれないのね？ 行って、しばらく妖精さんしてて・・・
- チヒロ 28 : 何年か経たないといけない。（絵を描きながら）雲の上に虹があって、その上にチョウチョ島があった。チョウチョ島の際は、井戸の中から声が聞こえる。（こっちに来る時に）お守りの人形を持って来る。
- 大門 29 : 今も持ってるの？
- チヒロ 29 : うん。
- 大門 30 : それは、普通の人には見えないってこと？
- チヒロ 30 : うん。
- 大門 31 : みんな持ってるの？ ママも？ ハジメちゃんも？
- チヒロ 31 : それはチョウチョさんに訊かないと分からない。
- ユカ 1 : あのさ、おばあちゃんさ、チョウチョ島でもおばあちゃんなの？
- チヒロ 32 : 妖精さんになった。（中略）（こっちに来る時は）また人間の姿になる。顔は違う。
- 大門 32 : 顔は違うんだ。でも分かっちゃう、前はこの人だったって？
- チヒロ 33 : 妖精さんの時しか分からない。
- 大門 33 : 朝、昼、晩はあるのかな？ みんな寝るの？
- チヒロ 34 : 寝るよ。でも朝しかない。太陽さん沈まない。
- 大門 34 : 寒くもない？

チヒロ 35: うん。雲が冷たい。

大門 35: 食べ物はあるの？

チヒロ 36: うん。

大門 36: 何食べてるの？

チヒロ 37: 人間たちのところにはないもの。(チョウチョ島では) 何でも虹色だった。おやつ時間とかはない。

大門 37: 好きな時に食べていいの？

チヒロ 38: 好きな時に食べていい。

大門 38: へえ、でも食べてばかりだったら、こんなになっちゃったり(太ったり)しないの？

チヒロ 39: そういうことはない、チョウチョ島ではない。太らない。おじいさんとかにもならない。

大門 39: 赤ちゃんとかにもならないの？

チヒロ 40: 赤ちゃんとかにもならない。

チヒロちゃんは、おなかの中にいた時のこと(狭義の胎内記憶)については次のように話した。

大門 40: おなかの中のことは覚えていない、チーちゃんは？

チヒロ 41: その時はお水の中にいた。

大門 41: おなかの中の時は、浮かんでる感じ？

チヒロ 42: なんか、泳いでる感じしてた。

大門 42: おなかの中のことで覚えてるのはプカプカ浮いてたことだけ？

チヒロ 43: まだちょっと覚えてる。

大門 43: ママの声とか聞こえたりした？

チヒロ 44: 聞こえたりした。

大門 44: どんなこと言ったか覚えてる？

チヒロ 45: うん、覚えてる。[内容については語らず]

また、生まれた時のこと(誕生時記憶)については次のように語っている。

大門 45: 生まれた時のことは何か覚えてる？

チヒロ 46: 生まれた時は、なんか明るかった。

大門 46: 誰かいたとか覚えてる？

チヒロ 47: うーん、覚えてない。

大門 47: 気持ちは覚えてない？ うれしいとか、疲れたとか・・・

チヒロ 48： なんか涼しかった。

大門 48： ひやっ、って感じ？

チヒロ 49： ちょっとだけ涼しかった。

大門 49： ママとはじめてあった時のことは覚えてる？

チヒロ 50： 覚えてない。



## 図1 チョウチョ島の絵

### 4. 考察

内容の考察に入る前に指摘しておきたいのは、チヒロちゃんが「覚えていること」、「分かること」とそうでないことを明確に区別し表現していること、さらにユカさんによれば話す内容は3歳前後から話し始めて以来首尾一貫していることから、大人に合わせて話を創作しているとは考えにくい点である（「チヒロ10」、「チヒロ25」、「チヒロ31」、「チヒロ47」、「チヒロ50」）。

また、Ohkado & Ikegawa (2014) で指摘したように、脳還元主義では説明できない記憶の代表は「過去生記憶」であるが、それは「中間生記憶」、「(狭義の)胎内記憶」、「誕生時記憶」といった同種の記憶との関連で調査すべきであり、当事者が4つの記憶のうちのどれを保持しているかを記録することが重要である<sup>5</sup>。この観点から言えば、チヒロちゃんの記憶は「過去生記憶」以外の三つを持つタイプであり、Ohkado & Ikegawa (2014) が「パターン2」と呼ぶ、最も頻度の高い型に属する。

チヒロちゃんの発言の内容に関してまず注目すべき点は、蝶の存在である。蝶が世界各地で魂や魂の不死生の象徴であることはよく知られているが<sup>6</sup>、内容的に大変深い臨死体験をした Eben Alexander 氏は *Proof of Heaven: A Neurosurgeon's Journey into the Afterlife* において次のように述べている (アレグザンダー, 2013, 7章<sup>7</sup>)。

そばにだれかがいるのがわかった。隣を見ると、それは深いブルーの目をした頬骨の高い、美しい女性だった。(中略) 私もその女性も、生き生きとした絶妙な色で彩られた、複雑な模様の平らなもの—蝶の羽根に乗っていたのだった。四方にも無数の蝶が舞い踊っていた。蝶は波のように群れをなし、ひらひらと下方の緑の中に消えては、また上空へ舞い上がってきた。一羽で飛ぶ蝶はおらず、色彩と生命が綾なす流れがひとつになって舞い飛んでいた。私は隣の女性と近づいたり離れたりしながら、花をつけた木々を抜けて飛んでいた。われわれが近づくと枝のつぼみが次々にほころび、花開いた。

Alexander 氏は蝶の羽根の色を「絶妙な色で彩られた」と表現しているが、同じものをチヒロちゃんは「虹色」と呼んでいるのかも知れない（「チヒロ2」）。また、Alexander 氏の体験で花への言及があるのもチヒロちゃんの発言と共通している（「チヒロ3」）。両者の類似性は、共通の体験を示唆しているように思われる。

チョウチョ島では自分は「妖精さんだった」とチヒロちゃんは述べているが（「チヒロ11」）、年を取らない（「チヒロ39」）、赤ん坊でもない（「チヒロ40」）、人間の時とは顔が違

<sup>5</sup>Ohkado (2015) では4つの記憶に関する大規模なアンケート調査を行っており、その結果は Haraldsson & Matlock (2016) でも取り上げられている。過去生記憶にのみ焦点を当てていた研究者達も他の記憶を合わせて調査する必要性を認識しつつあるようである。

<sup>6</sup>たとえば、Werness (2003, p. 63) を参照。

<sup>7</sup>本稿執筆に際して参照したのは同書の Kindle 版のためページ数は記載していない。



う(「チヒロ 32」)、太ったりすることも無い(「チヒロ 39」)といった特徴から魂状態の人間を表現しているように思われる。太陽は沈まず(「チヒロ 34」)、寒くもなく(「チヒロ 35」)、悪い人もいない(「チヒロ 21」) チョウチョ島は、他の子供が語る中間生の場所と同じようであり<sup>8</sup>、また霊媒を通して「霊」が語る死語の世界と同じ世界の世界である。実際、チヒロちゃんは「天国ってチョウチョ島」(「チヒロ 22」)とも語っている。面談時にはチヒロちゃんは「チョウチョ島もこっちも楽しい」(「チヒロ 22」)と語っているが、ユカさんによれば、面談の少し前くらいに「チョウチョ島では楽しいことしかなかったけど、こっちに来たらそうじゃない日もある」、「楽しいことがあった日はピンクの粉が溜まり、そうじゃない日は青い粉が溜まる」と語ったとのことで、チョウチョ島とこちらの世界との違いははっきりと認識しているようであった<sup>9</sup>。

チョウチョ島からこちらに来る時には「お守りの人形」を持って来る(「チヒロ 28」)、と語っている部分は絵本『かみさまからのおくりもの』(ひぐち, 1984)で子供が生まれる前に神様が与えてくれる贈り物の話を思い出させる<sup>10</sup>。実際、筆者が2013年に面談を行ったリサちゃん(当時8歳)は生まれる前に「お守りみたいなものを食べ、それを食べると色々な力が付く」と述べており、チヒロちゃんの言う「お守りの人形」も同じものではないかと思われる<sup>11</sup>。

また、チヒロちゃん自身は過去生記憶については語っていないが、人が死ぬとチョウチョ島に行って妖精さんになり、また人になって戻ってくると述べていることから、生まれ変わりを肯定しているようである(「チヒロ 24」)。母親のユカさんによれば、チヒロちゃんの大叔母(祖父の姉)が死去した時、祖父に「おばあちゃん(祖父の姉)はチョウチョ島に行って、また来るから」と語ったそうである。

また、チヒロちゃんがチョウチョ島では弟と一緒にいた(「チヒロ 4」)、と語っている点は多くの中間生記憶を語る子供の発言と共通している<sup>12</sup>。

子供達が語る中間生記憶にはしばしば「神的存在」が登場する。『勝五郎再生記聞』の中

---

<sup>8</sup>Ohkado & Ikegawa (2014)の調査では、子供達はこの場所を「雲の上」、「空」、「光」などと表現している。イギリス人としての過去生記憶を持っていたトモ君は中間生でいた場所のことを暑くも寒くもない「いつも明るい場所」と表現している。トモ君の事例は大門(2011)、Ohkado (2013)で報告しているが、トモ君の中間生記憶について報告したのは大門(2015a)においてである。

<sup>9</sup>ユカさんにこの話を聞いた後、チヒロちゃんに「今日はピンク色の粉溜まった? 青い粉溜まった?」と訊ねたところ「(ピンクの粉が) いっぱい溜まって」との返事が返ってきて安心した。

<sup>10</sup>絵本の中で、生まれたばかりの5人の子供達に神様が与える贈り物は、それぞれ、「よくわらう」、「ちからもち」、「うたがすき」、「よくたべる」、「やさしい」である。これと関連して、小学5年生の児童がかたった中間生記憶に基づいた絵本『うまれるまえのおはなし』(ひだの, 2017)では、生まれる前に神様からのプレゼントを一つ選ぶという描写がある。

<sup>11</sup>リサちゃんの事例についてはOhkado & Ikegawa (2014)で紹介しているが、この内容については触れていない。

<sup>12</sup>筆者が報告した事例の中では、妹のユメリちゃんと一緒にいたと語ったアイリちゃん(大門, 2017)、仲良しの友人カズヤ君と一緒にだったというマサトシ君、ハルカちゃん、ソウシ君(Ohkado, 2016)、弟のコウスケ君と一緒にだったと語るナツキちゃんがそうである(大門, 2018)。また、前述のトモ君も中間生で弟と一緒にだったと語っている。

での勝五郎は白い髭に黒い服を来た老人に導かれたと語っている<sup>13</sup>。Ohkado & Ikegawa (2014)は、調査した21例のうち4例でそのような存在に対する言及があったと述べている。いわゆる「胎内記憶」をテーマとした映画『かみさまとのやくそく～あなたは親を選んで生まれてきた～』(荻久保監督, 2016)に登場するココちゃんはその「神的存在」を「大仏」と呼んでいる。同じく映画に登場するスマレちゃん、サユリちゃん、マリちゃんは「かみさま」と呼んでいる。チヒロちゃんの発言の中にはいわゆる「神的存在」に対する言及はないが、大きなチョウチョがその役割を果たしているようである(「チヒロ 17」、「チヒロ 20」、「チヒロ 31」)。発言の中では大きさに対する言及はないが、ユカさんによれば、何でも知っているチョウチョは他のチョウチョより大きいとチヒロちゃんは言っているとのことである。この「神的存在」の役割について、チヒロちゃんが生まれる順番を決める場合があると述べている箇所があるが(「チヒロ 15」)、前述の映画の中でスマレちゃんが「かみさまが生まれる順番を決める場合がある」という趣旨の発言をしており、その共通性は大変興味深い<sup>14</sup>。

またチョウチョとのコミュニケーション手段として、絵を使うと述べているのは、脳卒中で左半球の機能の多く(特に言語機能)を失ったジル・ボルト・テイラー博士の以下の発言と共通しているようで興味深い(「チヒロ 15」、「チヒロ 16」、「チヒロ 18」)。

外部との世界とのコミュニケーションは途切れていました。言語の順序立った処理もダメ。でも、絵で考えることはできました。(テイラー, 2009, p. 108)

わたしは心の絵で考えていたので、一つの絵から始め、その上に連想を積み重ねて行くしかありませんでした。何十億という可能性を探らずには、一般的な概念から始めて、より細かい部分にたどりつくことができないのです。それって、とっても疲れてしまうんですよ。(テイラー, 2009, p. 112)

また霊媒の多くが「霊」からのメッセージを受け取る時、絵を見せられると語っており<sup>15</sup>、チヒロちゃんは脳の言語中枢を媒介としない、視覚に訴えるコミュニケーションについて述べているようである<sup>16</sup>。

中間生記憶について語る子供の多くが中間生で親、特に母親を選んだと語っているが、チヒロちゃんも同様の発言をしている<sup>17</sup>。チヒロちゃんの発言で興味深いのは、チョウチョ

---

<sup>13</sup> 平田篤胤/子安宣邦(2000)参照。

<sup>14</sup> スマレちゃんは、流産した子は優先的に生まれることが認められるが、それは「かみさま」が決めると述べている。

<sup>15</sup> たとえば、Beischel(2013)を参照。

<sup>16</sup> 脳活動が停止している状態での臨死体験者の「言語活動」も同様である。この点については大門(2015b)を参照のこと。

<sup>17</sup> 面談の中では述べていないが、ユカさんによれば、「父親も選んだ」と発言したこともあるとのことである。

島には井戸がたくさんあって、その「井戸」を通して母親を見たと言っている点である（「チヒロ 8」、「チヒロ 14」）。前述の、映画に登場するココちゃんは「テレビ」を通して、スマレちゃんは「鏡」を通して母親を見た、と言っている。この他、筆者自身が面談時に子供が言及するのを直接聞いた例として「絵本」<sup>18</sup>と「箱」<sup>19</sup>がある。

チョウチョ島からこちらの世界にやってくる手段として、チヒロちゃんはチョウチョに乗って来たと述べているが（「チヒロ 7」）、面談以外の場では UFO で来たと言ったこともあるそうである。母親の胎内に来る手段としては前述の映画のココちゃんは「滑り台に乗って来た」と語っている。またスマレちゃんは「エレベーター的なもので来た」と表現している。この他、筆者が直接聞いた中では「大砲のようなもので打たれてきた」<sup>20</sup>、「天使と一緒に来た」<sup>21</sup>、「鳥に乗って来た」<sup>22</sup>、「すっとやって来た」<sup>23</sup>、などがある。

中間生記憶に登場する「神的存在」や「それを通して地上（特に親）が見える物」、「母親の胎内に来る方法」について、子供達は様々に表現しているが、これは(i)現代の日本という文化および(ii)語彙の未発達性という二重の制約による影響であり、同一のものを指しているように思われる。つまり、図2に示すように「文化的フィルター」と「言語的フィルター」という二つのフィルターを通した結果様々に表現されているが、元は同一の体験ではないかと考えられる。

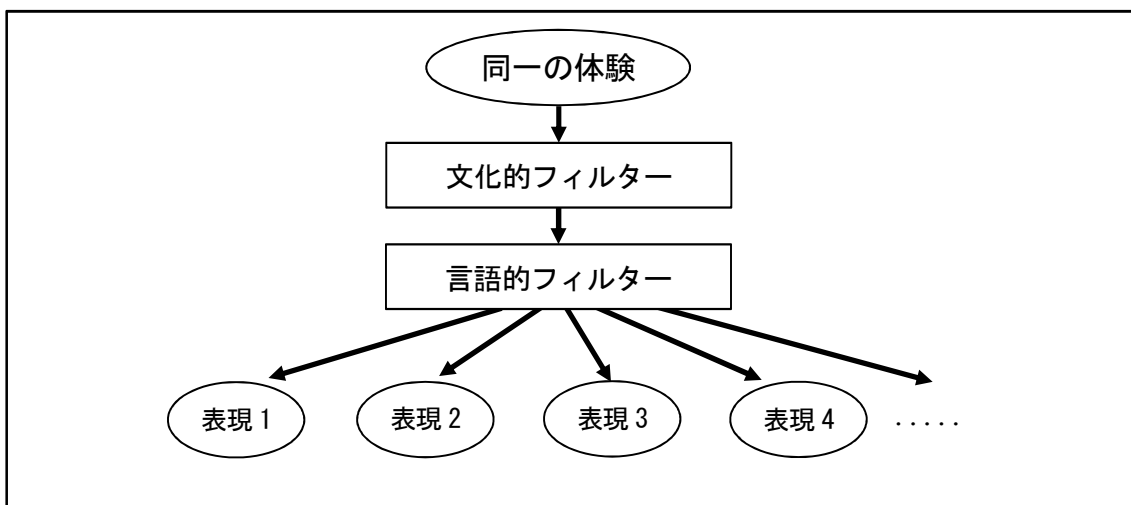


図2 「文化的フィルター」と「言語的フィルター」を通した表現

この関連で興味深いのは、同様の分析が臨死体験にも適応できることである。立花(2000)

<sup>18</sup>2016年、6才の時に面談したカエちゃん（未発表）。

<sup>19</sup>2013年、11才の時にある学会で話をしたサーシャちゃん（未発表）。

<sup>20</sup>大門(2017)で報告しているユメリちゃん。

<sup>21</sup>2016年、8歳の時に面談したライ君（未発表）。

<sup>22</sup>2013年、11歳の時に面談したスズノちゃん（未発表）。

<sup>23</sup>筆者の次女。3歳頃の発言。

が指摘するように、西洋の臨死体験においてはキリスト教の神やイエスに出会ったという体験が多いのに対し、日本人の体験では単なる光を見たという体験が多いが、これは文化的な違いを反映しているように思われる。また、昔の日本では閻魔大王に遭ったという体験が散見されたが、現在の日本ではそのような報告はほとんど見られない点も、閻魔大王が身近なものでなくなったことを反映していると言えるであろう。さらに、いわばあの世とこの世の境界として、日本の臨死体験では川が頻出するが、西洋では非常にまれである点も日本では「三途の川」が一般的によく知られていることと関係するであろう。このような文化的な相違点に関して重要なのは、Ohkado & Greyson (2014) が指摘しているように、相違は表層のものに過ぎず、体験そのものは共通であると考えられる点である。たとえば、巨大な光に遭遇する体験について報告する場合、文化的・言語的なフィルターを通さざるを得ないため、キリスト教的背景のある者は「キリスト教の神に出会った」、「イエス様に出会った」と感じられるのに対し、そのような背景のない多くの日本人にとっては「光に遭った」と感じられるわけである。この点は、中間生記憶と臨死体験の重要な類似性であり、両者が本質的に同じ体験であることを強く示唆するものである。

## 5. 結語

本稿ではチヒロちゃんが語るチョウチョ島の話を紹介すると同時に、その話に含まれる重要な要素について考察した。一見空想に過ぎないように思われる内容であっても、他の子供達が語る中間生記憶や、臨死体験者の語る「あの世」の描写、霊媒を通して「霊」が語る「死後の世界」の描写等と比較することにより、その重要性が浮き彫りになることを示した。チヒロちゃんの記憶の中には Rivus et al. (2015) が挙げているような AVP は含まれていないため三次元空間的な意味での現実性を問うことはできないが、数多くの体験者が報告している内容との共通性が見られるという意味において、人間心理の重要な一側面を示す貴重な記録であることに疑いはないであろう。

## 謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです(課題名: 出生前記憶を語る子供の実態に関する研究 承認番号: 260100)。本研究の一部は中部大学の特別研究費 (29IL206A) の援助を受けています。調査のきっかけを作ってくださった原桂子さん、調査にご協力くださった内藤有香さん、ちひろちゃんに厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

Alexander, Eben (2012) *Proof of Heaven: A Neurosurgeon's Journey into the Afterlife*. New York: Simon & Schuster. (エベン・アレグザンダー／白川貴子訳 (2013) 『プルーフ・オブ・ヘブン: 脳

神経外科医が見た死後の世界』東京：早川書房。)

- Beischel, Julie (2013) *Among Mediums: A Scientist's Quest for Answers*. Tucson, AZ.: The Windbridge Institute.
- Greyson, Bruce (1983) "The Near Death Experience Scale: Construction, Reliability, and Validity," *Journal of Nervous and Mental Disease*, 171(6), 369-375.
- Haraldsson, Erlendur & James G. Matlock (2016) *I Saw a Light and Came Here: Children's Experiences of Reincarnation*. Hove: White Crow Books.
- Matlock, James P. & Iris Giesler-Peterson (2016) "Asian Versus Western Intermission Memories: Universal Features and Cultural Variations," *Journal of Near-Death Studies*, 35(1), 3-29.
- Ohkado, Masayuki (2013) "A Case of a Japanese Child with Past-Life Memories," *Journal of Scientific Exploration*, 27(4), 625-636.
- Ohkado, Masayuki (2015) "Children's Birth, Womb, Pre-life, and Past-Life Memories: Results of an Internet-Based Survey," *Journal of Prenatal and Perinatal Psychology and Health*, 30(1), 3-16.
- Ohkado, Masayuki (2016) "A Same-Family Case of the Reincarnation Type in Japan," *Journal of Scientific Exploration*, 30(4), 524-536.
- Ohkado, Masayuki & Bruce Greyson (2014) "A Comparative Analysis of Japanese and Western NDEs," *Journal of Near-Death Studies*, 32(4), 187-197.
- Ohkado, Masayuki & Akira Ikegawa (2014) "Children with Life-Between-Life Memories," *Journal of Scientific Exploration*, 28(3), 477-490.
- Ring, Kenneth (1980) *Life at Death: A Scientific Investigation of the Near-Death Experience*. New York, NY: Coward, McCann and Geoghegan.
- Rivas, Titus, Elizabeth M. Carman, Neil J. Carman & Anny Dirven (2015) "Paranormal Aspects of Pre-Existence Memories in Young Children," *Journal of Near-Death Studies*, 34(2), 84-108.
- Rivas, Titus, Anny Dirven, & Rudolf H. Smit (2016) *The Self Does Not Die: Verified Paranormal Phenomena from Near-Death Experiences*. Durham, NC: International Association for Near-Death Studies.
- Sharma, Poonam & Jim B. Tucker (2004) "Cases of the Reincarnation Type with Memories from the Intermission Between Lives," *Journal of Near-Death Studies*, 23(2), 101-118.
- Taylor, Jill Bolte (2006) *My Stroke of Insight: A Brain Scientist's Personal Journey*. New York: A Plume Book. (ジル・ボルト・テイラー／竹内薫訳(2009)『奇跡の脳：脳科学者の脳が壊れたとき』東京：新潮社。)
- Werness, Hope B. (2003) *The Continuum Encyclopedia of Animal Symbolism in World Art*. New York: The Continuum International Publishing Group.
- 大門正幸 (2011) 「『過去生の記憶』を持つ子供について-日本人児童の事例-」『人体科学』20(1), 33-42.
- 大門正幸 (2015a) 『なぜ人は生まれ、そして死ぬのか』東京：宝島。

大門正幸(2015b)「言語中枢は脳のどこにあるのか?」『中部大学全学共通教育部紀要』1, 15-33.

大門正幸(2016)「過去生退行催眠療法による症状軽減効果と類似した特徴を示す自然発生再生型事例」『中部大学全学共通教育部紀要』2, 9-21.

大門正幸(2017)「誕生前・誕生時記憶を語る子供たち～日本における三つの事例」『中部大学全学共通教育部紀要』3, 13-27.

大門正幸(2018)「子供が語る胎内記憶によって誘発された霊的変容体験」『人体科学』27(1), 13-22.

荻久保則男監督(2016)『かみさまのやくそく～あなたは親を選んで生まれてきた～』(映画) 東京: 熊猫堂.

立花隆(2000)『臨死体験(上・下)』東京: 文藝春秋.

ひぐちゆみこ(1984)『かみさまからのおくりもの』東京: こぐま社.

ひだのかな代(2017)『うまれるまえのおはなし』東京: ポエムピース.

平田篤胤/子安宣邦(2000)『仙境異聞・勝五郎再生記聞』東京: 岩波書店.